

No creas nunca en cielo serrano, lágrimas de mujer y cojera de perro

ノ・クレアス・ヌンカ・エン・シエロ・セラーノ、
ラグリマス・デ・ムヘル・イ・コヘーラ・デ・ペルロ

信じる者は救われない

ラテンアメリカは、話し言葉の豊かな場所である。大統領は、演説が巧みであることが当然とされ、ポピュリズム（大衆迎合主義）政治を支える要因の一つにもなっているし、地方の小さな村でも、祝宴の席で子どもが、身振りを交えて詩を朗読することもよく目にする。

●笑い話チステはペルー大衆文化の代表格

私がここ三〇年、発

掘調査に通っているペ

ルーも例外ではない。公用語として流通するスペイン語に限つても、ペルー独自の意味や表現を指すペルニアスモや、それに含まれもしょが、辞書的な意味から派生させて文意を多義にしてしまうドブレ・センティード（二重の意味）などさまざまな表現法があり、またこれらを駆使して語られる笑い話チステは、ペルー大衆文化の代表格である。タクシーに乗れば、

運転手はハンドルから手を離すほど語りに熱中し、友人の集まりでは、登場人物の声色を使い分けながら、競い合うように何時間でもチステを披露しあう場面に必ずや出会う。顔を赤らめるようなテーマ（赤いチステ）から政治的話題まで、際どさや銳さが目立つチステは、わが大阪を凌駕するほどの笑いの宝庫である。

●足の不自由な犬は信じちゃいけないよ

そんな人間臭いラテンアメリカの対人関係ならば、さぞかし人の良い人たちばかりかと思ひきや、どっこいだまされることが多い。たいていは、たわいのないことばかりだなのだが。

そんなとき、「だからよく言うだ

ろう」と諭すように始まるのが、今

回とりあげたスペイン語の言い回し

だ。直訳すれば、「山の空、女の涙、

足の不自由な犬は絶対に信じちゃ

いけないよ」となる。女性を怪しげな存在と見ていることからすれば、男

性側に立つ表現かもしれない。

一方で、場所によつては、「運転手の言葉」という表現が信じちゃいけないものに加わることもある。長

距離トラックかバスの運転手のこと

だらう。到着までの時間や運転技術の未熟さを心配しての言い回しではないようだ。こうした運転手が女性を誘う代表的職業と見なされていることから考えれば、女性側に立つて警告を発している表現にも受け取れる。ちなみに、私の調査地の村では、近頃「考古学者の言葉」を追加するケースを耳にした。襟を正さねば。

●だますことはメステイソの生存戦略の一つ

さてラテンアメリカでは、植民地期以降、ヨーロッパ人支配層と、支配された先住民との間に混血メステイソが生まれ、場所にもよるだろうが、今や人口の大半を占めるようになった。

メステイソは、その社会的に曖昧な位置づけ故に、アイデンティティも持ち得ず、双方の階層間を巧みな身の処し方で媒介し、生き抜いてきた歴史をもつ。だからこそ、だますことも、メステイソの生存戦略の一つであり、言葉の勝負であったのだろう。

それにしても、足を引きずる犬までも、餌をもらうと、舌を出して立ち去る健常犬としてふるまうのなら、ペルーの犬はかなり賢い！



街角で売られるチステ集



アンデス地帯で家畜化された無毛犬

専門はアンデス考古学。アンデス山中に眠る紀元前の古代神殿を発掘し始めて今年で三十一年。権力の発生過程を検証するとともに、文化遺産を核とする住民参加型開発を模索中。

民博研究戦略センター
関 雄一
せき ゆうじ